

平成 31 年度 入学者選抜試験問題

国 語

実施日時：平成 31 年 1 月 24 日（木） 9：00～9：50

* 次の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに 2 つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2 項目のすべてに記入またはマークする。
 - ・ 受験番号欄 上段に受験番号を記入し、下欄にマークする。
 - ・ 氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を記入する。

— 開始後 —

1. 問題は 2 ページから 18 ページまでの各ページに印刷されており、第 1 問、第 2 問の 2 題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

3

と表示のある問いに対して 2 と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号 3 の解答欄③をマークする。

〈例〉

1	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

3. マークする際は HB の鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後の途中退出はできない。

受 験 番 号

--	--	--	--	--	--

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

国民という「人々」の発生と市民という「人々」の誕生が近代社会の形成であるとするなら、近現代とは「人々」の時代である。そしてこの時代は、(a) 新しい「人々」を生み出した。労働者という「人々」である。

絶対王政時代に展開したマニユファクチャー型生産においても労働者は存在した。そればかりか古代においてさえ、労働者は存在するといつてもよい。日本においても東大寺の造営(八世紀半ば)のために労働者が集められた記録があるし、古墳の造営にも同じようなことがおこなわれていたかもしれない。だが近代以前の働く人々は、アツトウ的に農民であり、少数の職人や商人たちであった。それ以外にも神官や僧侶、特殊な技能集団に属する人々もいたが、そのすべての人たちがそれぞれに結び合う自分たちの世界をもつて暮らしていた。おそらく東大寺の造営にたずさわった労働者たちも、かりだされた農民だったことだろう。とすれば彼らはその仕事が終われば、農民の暮らしに戻っていったはずである。

フランスでは一八三〇年代に入ると、産業革命が本格的に展開するようになった。当然この動きは近代的プロレタリアを生みだす。雇主を求めて賃金をえるために働く人々を、である。

それは新しい個人を発生させることになった。農村共同体にも、都市の職人や商人の共同体にも属さない人々。個人の労働能力だけが資産であり、この労働能力を購入してくれる雇い主を探して漂う新しいタイプの労働者という個人たちが大量に誕生した。

労働者という「人々」が発生したのである。そしてそれは資本家という「人々」の誕生でもあった。

こうして近代の社会は「人々」という群れによって構成されていくようになる。国家においては国民という群れがあり、社会においては市民という群れがいる、さらにその内部には労働者という群れや資本家という群れが存在している。それが近代が生み出した「人々」の社会だった。

結び合う社会から離れた個人という人間たちの登場が、「人々」を誕生させたのである。個人は自己認識としては唯一無二の人間、この世にたった一人しかない貴重な人間であるが、社会構造のなかでは「人々」として存在する。そしてこのくい違いが、人々にシヨザイなさを与えることになった。

自己認識された自分はこの世に一人しかない、個性ある生き方をしている人間である。しかし国民としては、

国民という群れのなかの一人であり、「人々」でしかない。海外からの帰国時に入国^(ウ) シンサを受けようとして並んでいる群れの一人ではないのだ。たとえ私がこの世を去ったとしても、そのとき新たな一人が生まれていれば国民としては同数である。私はここではどうでもいい一人であり、他の人とおき換えることのできる、その意味で交換可能な人間、国民にすぎない。

この関係は市民においても、資本家や労働者においてもあてはまる。自己認識された自分は唯一無二の人間でも、社会においては交換可能な一人にすぎない。一人の労働者が辞めても一人の労働者を雇えばそれで片は付く。新しい企業を起こし、その企業を大きくしてきた経営者は、(b)ベンチャー企業の経営者である。本人は自分の能力と努力によって経営を成功に導いたと思っっている。唯一無二の自分がここにいる、と。しかし社会としては、彼もまた交換可能な経営者にすぎない。起業家という群れのなかの一人にすぎない以上、彼がこの世を去ろうと、あるいは彼の企業が経営的に行き詰ろうとも何の意味もないのである。新しい起業家はこれからもでてくるだろう。新しく大きくなっていく企業もこれからも生まれるだろう。そういう群れのなかのひとコマにすぎない。

それは草原を歩くキリンやバッファローの群れと同じである。その一頭一頭にはドラマがあり、ときに何かが起きていても、外からみればつねに X だけである。

私たちが生きているのは、こういう鬱陶しい世界だ。自己認識された自分と、社会的自己が断絶し、切り裂かれている。ここには根源的な不調和がある。

私も毎年いくらかの税金を払っている。ここでは納税者という「人々」の一人である。毎日買物をしたり食事をしたりしている。ここでは消費者という「人々」の一人だ。国家においては私は納税者にすぎないし、経済のなかでは消費者にすぎないのである。

- A こうして具体性をもっていたお金は、遠くに逃げ去っていく。
- B ある人にとっては教育資金や住宅ローンの資金、老後の備えかもしれない。
- C しかし納税者という「人々」の群れのなかでは、それは具体性をもたないお金として支払わされていく。
- D 手元にあるお金は、誰でもそうであるように、自己との関係のなかで具体性をもっている。そのお金は生活資金かもしれないし、ちよつとした旅行費用かもしれない。

消費者としても一人一人の人間は具体的である。必要なものを吟味して購入している。しかし経済のなかにおいては、合算された「人々」の消費にすぎない。消費が上向いたとか低下しているとかいうときの数字の一億分の一ほどの意味しか保有していない。こうして消費者という存在もまた「私」という（甲）を失なうて、消費者一般という遠い世界に逃げ去る。

国民、市民、資本家、労働者という「人々」を生みだした近現代という時代は、さらに多くの「人々」の世界をつくりだしてきた。納税者という「人々」、消費者という「人々」、学校の教員はこの社会のもとでは先生という「人々」である。自己認識された自分は、自分にしかできない教育者であったとしても、今日の社会、教育システムのなかでは交換可能な先生という「人々」の一人にすぎない。大きな企業になれば管理職も、管理職という「人々」の群れにすぎないし、芸能人もまた交換可能な芸能人の「人々」の群れとして、この社会に存在している。それは人間だけのことではなく、企業も（c）企業という群れとして社会のなかに存在し、ある企業が倒産しても別の企業が台頭すれば⁽⁺⁾チヨウジリの合う世界が形成されている。こうしてこの世界は「人々」や「群れ」に覆われるようになった。

だからこそ現代世界では、存在の不調和が発生してしまうのである。「私」は私自身でしかないはずなのに、社会的存在としての私は「人々」や「群れ」のなかの一人にすぎない。「人々」の誕生はこのような問題を発生させた。それは「人々」に、自己の存在感の薄さを感じさせるようになった。「私自身」を社会は「人々」としてしか認識しない。「私」を「私」として承認するものが「私」しかないのである。社会化された瞬間に「私」は遠くに逃げていく。そんな感覚がこの時代の人たちを覆うようになる。

この現実には人間たちに重荷を与えただけではなかった。国家や社会もまた、その基盤を脆弱にしたのである。

国家や社会、経済や企業などのなかでは、自己が自己として扱われないのであれば、私たちは冷めた感覚で国家や社会、この経済社会をながめるだろう。自己⁽⁺⁾ホシンのためには、それらを承認するふりをするかもしれない。しかし、その価値を信じてはいないだろう。どことなく、どうでもいいものなのである。国家や社会の側が自分でもうでもいいものとして扱うのなら、自分にとっても国家や社会がどうでもいいものになる。そういう（乙）な関係が自己と国家、社会、経済、企業との間につくられる。そうである以上、近現代という時代は、根源的な不信任感を内包しながら展開することになる。根源的には国家や社会も経済や企業も人間たちを統治することができ

ず、人間たちは本気でそれらに従おうとしない。そういうものを内部にもちながら、社会は動いていくことになる。

(出典 内山節『新・幸福論——「近現代」の次に来るもの』より)

(注) *マニユファクチャー：工場制手工業。賃金労働者の分業に基づく協業に立脚した資本制生産の初期形態。

*プロレタリア：資本主義社会において生産手段をもたず、自分の労働力を資本家に売って生活する賃金労働者。また、その階級。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(ア)	アツトウ	①	倒	②	踏	③	到	④	等	⑤	当
(イ)	シヨザイ	①	処	②	所	③	緒	④	諸	⑤	署
(ウ)	シンサ	①	進	②	信	③	侵	④	審	⑤	振
(エ)	チヨウジリ	①	調	②	帳	③	超	④	跳	⑤	張
(オ)	ホシン	①	保	②	補	③	捕	④	歩	⑤	帆

問二 空欄(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は(a) 、(b) 、(c)

- ① いわば ② さらに ③ かりに ④ やがて ⑤ また

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）、（乙）

（甲）

- ① 普遍性
- ② 固有性
- ③ 妥当性
- ④ 必然性
- ⑤ 人間性

（乙）

- ① 排他的
- ② 否定的
- ③ 悲観的
- ④ 自虐的
- ⑤ 虚無的

問四 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

- ① 群れと一頭が断絶している
- ② 一頭一頭が群れを形成している
- ③ 群れが存在している
- ④ 群れがドラマを凌駕りよがしている
- ⑤ 交換可能な群れとして存在する

問五 本文 の中のA～Dの文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、

次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 12

- ① A↓D↓C↓B
- ② C↓B↓A↓D
- ③ C↓D↓A↓B
- ④ D↓B↓C↓A
- ⑤ D↓C↓B↓A

問六 傍線部A「新しい個人」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 13

- ① かつて大事業にかりだされ、仕事が終われば農民の暮らしに戻っていた労働者ではなく、近代になり雇い主を求めて賃金をえるために働くため農民の暮らしに戻ることのできない労働者のこと。
- ② かつての農民、少数の職人や商人のように自分たちの世界をもつて暮らしていた人たちではなく、個人の労働能力だけを資産として雇い主のために働く労働者という「人々」のこと。
- ③ 農村共同体、都市の職人や商人の共同体など、あらゆる「群れ」に属することなく、ただ自分の労働能力だけを資産として雇い主のために働く労働者という「人々」のこと。
- ④ 近代以前の賃金と引き換えに大きな建築物の造営にたずさわりそれが終了すると本来の職に戻る労働者ではなく、近代になり出現した個人の労働能力だけを資産として雇い主を求める労働者のこと。
- ⑤ 近代以前に生み出された国民という「人々」や市民という「人々」とは異なり、近代になって生み出され近現代の中心となっている労働者という「人々」のこと。

問七 傍線部B「現代世界では、存在の不調和が発生してしまう」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

14

- ① 近現代では、多くの人が国民、市民、資本家、労働者という「人々」とみなされ、群れのなかの一人として認識されるため、社会と切り離されてしまっているから。
- ② 本来は自己認識された自分は唯一無二の自分であるのに、社会システムのなかでは交換可能な「人々」の一人にすぎず、群れのなかから遠くに逃げ去ることさえ許されていないから。
- ③ 近代になり多くの人が国家、市民、資本家、労働者という「人々」の世界をつくりだしてきたうえ、今日では職業や企業さえも群れとして個人を交換可能な「一人」のなかに引き入れようとしているから。
- ④ 現代社会では自己認識された自分は交換可能な「人々」の一人にすぎず、企業や職業のような群れに覆われた個人はその能力を自分のなかに閉じ込めざるを得ないから。
- ⑤ 今日では、国民、市民、資本家、労働者のみならず職業や企業までもが群れのなかの一人（一つ）として、自己認識された唯一無二の自分と断絶し切り離されてしまっているから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 15

- ① 近代の社会は「人々」という群れによって構成されていくようになったが、社会には国家、市民、労働者、資本家という群れが対等に存在し、「人々」を存在させた。
- ② 資本家はある程度自己認識された自分を保つことができるが、群れのなかの一人である労働者は労働者という群れのなかの一人として存在するため、自己認識された自分を保つことが難しい。
- ③ 新しい企業を起こし自分の能力と努力によって経営を成功に導いている経営者ですら、労働者という群れのなかの一人にすぎず、自己認識された自分においても交換可能な存在とみなされる。
- ④ 消費者の一人一人は具体的な考えを持ち必要なものを購入している一方で、経済のなかにおいては存在を「人々」の一部にみなされ、消費の上昇や低下を左右する力をもつ存在でしかない。
- ⑤ 国家や社会、経済や企業のなかで人間の自己が自己として扱われないことによって、人々は国家や社会をどうでもいいものと捉えることになり、国家や社会の基盤を脆弱にすることにつながっている。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本語はあいまいだ、というひとがいる。ときには「日本語はあいまいだから」などと先験的にきめつけてこれを日本語の特色ととらえて日本語論を展開するひとがいる。これはあきらかにまちがいである。

(a)、「絶対反対」と簡潔にひとことという。この表現は「あいまい」であるか。けっしてあいまいではない。はつきりしている。しかし「あなたのおっしゃることはごもつともですが、やっぱりなんとなく、ちよつとちがうような気がしないでもないんですけどねえ」といえばあいまいである。問題はもののいいようであって、ことばそのものがあいまいなのではない。

この「日本語あいまい」説がどこからでてきたものか、正体はよくわからないが、こういうひとにかぎって、すぐにまた英語をもちだして「英語はイエスとノーがはつきりしている」などという。これもウソである。(1)

だいたい、英語がつねに「イエス」と「ノー」の二分法で成立している、などというのはほとんどもない誤解、⁽⁷⁾キョツカイである。英語だって、じつにもつてまわつたあいまい表現がたくさんある。わたしは学生のころだれだったかイギリス人作家の短編小説を読んで、そのなかで“pecuniary embarrassments” うんぬんといういいまわしをおぼえた。しいて日本語に訳せば「金銭上の困惑」とでもいうべきか。要するにお金がない、ということである。ずいぶんむかしのことなので忘れてしまったが、たしか下宿人が気のいい家主の婦人に部屋代を払ってくださいいな、といわれて弁解する場面でのセリフだつたとおもう。なるほど、こんなふうにいうことができるのか、と感心した。結論からいえば「ノー」なのだがけっして「ノー」とはいわないのである。そしてこの前後の会話はおおむねこんな調子の表現がつづき、それがイギリス中産階級の「英語」というものだ、と教えられた。おなじお金がない、というのでもいろんないかたがある。どっちみち下宿代が払えないのは事実だけれど「金銭上の困惑」うんぬんと口をもごませていれば、⁽¹⁾サイソクするほうもあんまり強気のことばをかえすことができない。(2)

じじつ、わたしなどの経験からいってもイギリス人の英語表現にはきわめてあいまいなところがある。文法学者のいう「仮定法過去」などもしばしばそんなものではないか。たとえばなにかをことわる、拒絶するとき「wish if I could」などと。ダメならダメなんだから「ノー」と直截^{ちやくせつ}にいうのではない。「仮定法」などというものであいまいにことわる。日本語でいえば(甲)「そうしてさしあげたいのは山々でございませう」とい

ことになるのだろうか、そういうとき「さしあげたい」んならそうしろ、というのは無理な相談だ。だからダメといわずにあいまいにおことわりする。この（乙）拒絶がわからないのはよほど鈍感なひとである。（3）

わたしなどの経験はきわめてかぎられているが、国際会議などでの発言をきいていると、ある意見に賛成なのかとおもうとさにあらず、よくきいていると、ほんとうは「おまえさんのいつてることはまちがいだ」といつているのに気がついたりする。英語の婉曲表現、あいまい表現はじつにすごい。きつい皮肉がこめられた表現もたくさんある。（4）

じつさい英語の語法が「イエス」と「ノー」でできあがっている、などというのは誤解というだけではなく英語にたいする侮辱である。あいまい表現というのは洗練された言語がもつ文明の技術であって、なに^ごとも「イエス」「ノー」だけで成立している文化があるとすれば、それは未開野蛮の文化というべきであろう。英語はけっして野蛮人の言語ではない。（5）

英語だけではなく、歴史的に洗練をかさねてきた言語は例外なくあいまい表現という技術をもっているようである。漢語だってフランス語だって、ずいぶんあいまいな表現法をもっているにちがいない。さまざまな言語でかかれた本が日本語に翻訳されているから、それをよんでみるだけでもドイツ語、スペイン語、ルーマニア語その他もろもろの言語のあいまい表現の事例にはこと欠かない。

ハワイ語の「アロハ」はだれでも知っているだろう。ハワイ語だけでなくポリネシアの島々で「アロハ」、ときには「タロファ」ということばは共通してしばしばつかわれている。そしてわれわれの大部分はこれを「歓迎」「ようこそ」という意味だとおもっている。それにまちがいはない。ホノルルの空港に到着すると「アローハ」といつて首にうつくしいレイをかけてくれることもあるし、港にそびえる塔は「アロハ・タワー」である。いずれも「ようこそ」と訳して問題はない。（b）、じつさいのハワイ語のなかで「アロハ」がもつ意味はずっと深い。そもそもハワイ語ではことばのことを「マナ」という。日本の「ことだま」のようなもので、「神の力」ということ。そして「アロハ」とは「神の心」といったようなことを意味する。要するに「神聖なるとき」ということだ。これに「オエ」がくっついて「アロハ・オエ」になると「さようなら」ということになる。いや、「さようなら」よりもっと厳粛な別れであって「これでいよいよお別れですね」といった気分。だから、お葬式での別離のことばも「アロハ・オエ」になる。とにかく精神が愛情とカン^ウシヨウで高揚した状態が「アロハ」なので、

X

日本語だって高等な言語だから、あいまい表現はいくらでもできる。大阪商人が「かんがえさしてもらいますわ」というときには、おおむねダメということである。「かんがえる」といったのだから、しばらくコウ(4)リヨ(4)して返答するのだろうか、とおもうのはまちがいである。正面からダメです、おことわりします、といったら角がたつ。だからこういう語法をつかう。京都で「へえ、おおきに」というのは「アロハ」のたぐいで、文脈によって「イエス」にもなるし「ノー」にもなるし、ときにはそのどっちでもない。このあたりの呼吸を心得ておかないと関西での会話は成立しない。だから関西のひとははっきりしない、本心がわからぬ、などというのは関西弁の社会言語学がわかっているからだ。柳田國男*やまぐに先生がしばしばこのような語法をとりあげて、それは畿内がはやくから都市として成熟し、他人と摩擦をおこさないために発明した知恵だ、と考察されたのはたぶん嬉しい。ついadenaが、若いころ京都で参加していたある研究会で先生が「そら、ちよつとちやうなあ」とコメントなさるのは「おまえはダメだ」ということとドウ(4)ギ(4)であった。

このような事例をもちだすまでもなく、だいたい「あいまい」というのはけっして悪徳ではない。イギリスの詩人エンプソンが『あいまい性の七つの型』(一九三〇)でのべたように、そもそもことばの美学、とくに詩の言語などは「あいまい」こそが身上で、あいまい性のない詩はありえない。ふつう文学といわれていることばの芸術もあいまいさがなければ成立しえない。「三角形ノ面積ハ底辺カケル高サノ二分ノ一」という命題は明快で、あいまいさはゼロだけれども、これは幾何学の公式というものであって、こんなものだけで日常会話が成立するはずがない。ふだんのことばには、いくばくかのあいまいさがあるからよいのである。

もしもあいまいが悪ならば、およそ文芸はありえないし、ふだんの暮らしで摩擦なく生きることもしかない。日本語は俳句に代表されるようにあいまいだ、と書いているひとがいるのでわたしは腹が立った。そんなことをいつていたらワーズワースの詩だってあいまいだし、タゴールの文章もあいまいだ。李白*りはくだってケストナー*だってあいまいじゃないか。(c) どんな言語だって、あいまい表現をしようとおもえばいくらでもできるのだし、あいまいでなければそもそも修辞学*がなりたたないのである。

こんなふうにかんがえてくると、日本語があいまいだ、という説はまったく根拠のないものであることがわかる。もしもこの説にいささかの真理があるとすると、日本人は日本語をつかうにあたってあいまい表現を使用する傾向がつよい、ということなのだろう。「日本語はあいまいだ」というのはまちがいである。あいまいなのは日本語

の性質に起因するのではなく、この言語をつかうひとびとの使用法なのである。このふたつははっきり区別しておかなければならない。

もしもいまの日本語が「あいまい」だというなら、それはあいまい表現をつかうひとがふえてきた、ということなのであろう。「あいまい」はそれじたい悪ではない。いろんないいまわしをつかって明晰めいせきにもあいまいにも言語がつかえる、というのは立派な言語技術なのである。文明の言語というのはそういうことだ。

(出典 加藤秀俊『なんのための日本語』より)

※本文は、出典の記述を一部省略している。

(注) *柳田國男：日本の民俗学者。

*畿内：京に近い昔の五か国の総称。現在の大阪府と奈良県のほぼ全域、京都府と兵庫県の一部にわたる地域。

*ワーズワース、タゴール、李白、ケストナー：いずれも著名な詩人。

*修辞学：最も有効な表現方法を研究する学問。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分の漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 16、(イ) 17、(ウ) 18、(エ) 19、(オ) 20

(ア)	キョツカ	①	曲
(イ)	サイソク	②	局
(ウ)	カンシヨウ	③	極
(エ)	コウリョ	④	採
(オ)	ドウギ	⑤	再
			擧
			儀
			議
			疑
			宜
			義
			旅
			慮
			賞
			傷
			涉
			衝
			催
			債
			斉
			傷
			再
			擧

問二 空欄（ a ）（ c ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。
ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

解答番号は（ a ） 21、（ b ） 22、（ c ） 23

- ① つまり
- ② さらに
- ③ たとえば
- ④ なお
- ⑤ だが

問三 空欄（ 甲 ）（ 乙 ）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（ 甲 ） 24、（ 乙 ） 25

（ 甲 ）

- ① たいてい
- ② たとえば
- ③ さしずめ
- ④ なまじ
- ⑤ のきなみ

（ 乙 ）

- ① はつきりとした
- ② 皮肉な
- ③ 流暢りゅうちやうな
- ④ 高圧な
- ⑤ ていねいな

問四 空欄

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

26

- ① これは微妙にあいまいな表現といえる
- ② これもきわめてあいまいな表現なのである
- ③ これは野蛮人の言語だとはいえない
- ④ これは最もあいまいな表現といわれている
- ⑤ これがあいまい表現のルーツなのである

問五 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

27

場をかさねるにつれて英語世界のあいまいさがだんだんわかってきた。

- ① (1)
- ② (2)
- ③ (3)
- ④ (4)
- ⑤ (5)

問六 傍線部A「英語にたいする侮辱である」とあるが、「侮辱」という理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 28

- ① 英語は「イエス」と「ノー」の二文法で表現される傾向にはあるものの、ここぞというときには英語でもあいまい表現が用いられるから。
- ② 英語がつねに「イエス」と「ノー」の二文法で成立しているというのはまったくのデタラメで、あいまい表現を多く用いることこそが英語を洗練された言語として位置づけているから。
- ③ 英語にもあいまい表現は数多くあり、あいまい表現というのは洗練された文明の技術ともいえるものであるのに、まるで英語が「イエス」と「ノー」の二文法だけで成立しているようにいつているから。
- ④ 英語は「イエス」と「ノー」の二文法だけで成立することができるという一面に加え、日本語で用いられるあいまい表現と同じくらい高度なあいまい表現が用いられているから。
- ⑤ あいまい表現というのは洗練された言語がもつ文明の技術なので、日本語よりも国際的に多く用いられる英語があいまい表現を用いることができないわけがないから。

問七 傍線部B「わたしは腹が立った」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

29

- ① 外国においても文学はあいまいさがなければ成立せず、どんな言語でもあいまいな表現はいくらでもできるものなのに、日本語があいまいだと書いてあるから。
- ② あいまいさは場合によっては評価されるものであり、俳句においてもいくばくかのあいまいさがあるからよいものなのに、俳句にあいまいさがあることを悪のようになっているから。
- ③ ことばの美学、とくに詩の言語などは「あいまい」こそが身上であり、あいまいさがなければ成立しないのに、あいまいさを表現する文学を否定するような物言いをしているから。
- ④ 詩を代表するように外国の文学にもあいまい表現は用いられており、どんな言語でもあいまい表現をしようとおもえばいくらでもできるのに、日本語だけがあいまいのような物言いをしているから。
- ⑤ 「あいまい」というのは決して悪徳ではなく、日常生活を成立させるのにあいまいさは必要不可欠なものであるのに、日本語にあいまい表現を用いることがよくないように述べているから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 30

- ① 日本語でも表現によってははっきりとしたものいいをすることはできるうえ、他の言語にもあいまいな表現はいくらでもあるので、「日本語はあいまい」という論はまちがいである。
- ② 英語を使用するときでも、たとえばなにかをことわるときのように強気なことばを用いることを避けたい場面はあり、そのようなときに「仮定法過去」のようなあいまいな表現が好んで用いられる。
- ③ 歴史的に洗練をかさねてきた言語には例外なくあいまい表現という技術があり、日本語のほかにあいまいな言語としては英語、ドイツ語、スペイン語、ルーマニア語が挙げられる。
- ④ ハワイ語の「アロハ」は、日本人には「歓迎」「ようこそ」という意味が浸透しているが、じっさいはそれ以上に「アロハ」は深い意味をもっており、人間の心情を表すときに多く用いられる言語である。
- ⑤ どの言語の文学にもあいまいな言葉は不可欠であるが、詩を代表する文学に用いられる「あいまい表現」と断続的な関係にあるのが、三角形の面積の公式のような明快な命題である。